

私の故郷高田はスキー発祥の地で、その昔オーストリアのレルヒ少佐が高田金谷山でスキーを陸軍の兵隊に教練したそうです。小学校、中学校、高校と冬の体育はスキーが正課で、中学、高校では毎週午後半日を潰して金谷山でスキーの授業でした。金沢近郊のゲレンデ同様重い雪質で、行き帰り持ち歩くスキーや歩きにくいスキー靴に辟易させられました。

縁あってワンゲルに入部した1年生昭和46年初め、白馬若栗スキー場でのスキー合宿は、スキーもさることながら、余興の班毎のコントもあって、教養部で経済指導教官だった永井義雄先生も来られ、今話題のお盆で裸(に近い)踊りを披露され大いに受けました。どんなスキーをしたのかも覚えていませんが、先生の踊りは忘れられない思い出です。

両親が他界し誰も住まない実家を処分するため、最近親の取りまとめていたものの後片付けをすることになって、懐かしい当時のベルクハイム誌や、青焼きコピーでのパーワン案内書や計画書が錆びたホチキス針で留められて出てきました。そんな中から大学の成績である単位取得カードの束も出てきて、永井先生の経済原論もありました。一生懸命勉強したんだと思い出しつつ、自分のことを期待して大切にしてくれていた親に改めて感謝しました。

青柳先輩の力を入れていらっしゃるスキー合宿の前身のことで、本来の趣旨からずれています。そんな昔と学生時代を謳歌していた自分のことを思い出したひと時でした。

【編集者注：Wikipedia から抜粋】

※永井義雄（1931年生まれ）経済学史学者
名古屋大学名誉教授。1954年名古屋大学経済学部卒業。水田洋に師事。65年金沢大学教養部助教授、75年同教授、81年名古屋大学教授
ロバート・オーウェン、ベンサムを中心として英国社会思想を研究する。

【永井義雄先生から私(松縄宏)への手紙】

暑中お見舞い申し上げます。

私は先に護憲論者のように書きましたが、実は改憲論者です。と言って今世紀はおろか、数世紀は実現しない夢、共和国に改編したいのです。天皇家の支柱に神道があります。(中略) 昭和期には、美濃部天皇機関説が学問の府から追われます。この時解釈改憲が行われます。明治憲法は、立憲主義の憲法でしたが、天皇が陸海軍を「統帥す」という一条があり、これが軍の解釈により三権の上に置きました。それで美濃部学説が邪魔になりました。学問の自由がないと、その結果は戦争と国の崩壊でした。

しかし、国が歴史から学ぶためには我が国はまだ経験が足りないようです。ドイツは二回の過ちを経て、何とか歴史に学ぶことの大切さを大統領が口にするように成りました。我が国はまだ一回です。しかも、ドイツとイタリアは、解釈改憲によってか、アメリカの戦争に参加し(集団的自衛権)、戦死者をそれぞれ数十名出しています。なかなか口でいいことを言っても、実行を伴わないものです。外務省と官邸は国連安保理に入りたくて、「普通の国」になりたいとのことですが、あれもこれも「ご主人様」のご意向なのではないでしょうか。こういうのを止めることこそ、「戦後体制」からの脱却になりなのであって、今のままでは「戦後体制維持」を貫くことになるのではないのでしょうか。(中略)

ただ、どんな組織にも長所と短所があります。長所だけの制度は残念ながら人の制度にはありません。その時々に必要な制度を使っていくしかありません。憲法もその一つです。ただ九条には拘っていいと思います。私は徹底的に拘っていきます。自衛隊は違憲です。戦力です。いくら災害時に役にたつからといって、人を殺す集団を持つてはいけません。そう九条は言っています。解釈改憲はもう長年に渡って行なわれてきています。STAP細胞はありませんでしたが、違憲抑止力はもう過分にあります。

暑い夏です。災害の多い夏です。お健やかにお過ごし下さい。

2014年8月盛夏

永井 義雄